

資料整理に携わって思う事

山下 善寛

熊本学園大学水俣学研究センター客員研究員、元新日本窒素労働組合員

はじめに

熊本学園大学の水俣学開設20年おめでとうございます。この間、多くの困難・ご苦労があったと思いますが、まず原田正純先生（故人）、目黒純一事務局長、坂本正学長（当時）、花田昌宣先生、宮北隆志先生等、多くの先生方がこれまでの大学の枠を超えた新しい学問「水俣学」開設の英断に感謝したいと思います。また水俣学現地研究センターを併設していただき、新日窒労組の資料を引き受け、活用していただいている事に対しても、深くお礼を申し上げます。

今年には戦後80年、水俣病公式確認から69年が経過しました。しかし戦争や水俣病の教訓は活かされず、世界各地で戦争や紛争が続き、水俣病問題も解決していません。今こそ「水俣学」の国際的視点に立って世界に向け発信し、戦争や公害をなくす努力が必要です。水俣学のさらなる発展を期待し、開設20年の感想を述べさせていただきます。

新日窒労組の資料はなぜ残せたか？

新日本窒素労働組合（以下、組合または新日窒労組）の資料が、結成時から解散までの59年間全て、ほぼ完全な形で保存され残されている事は珍しいとのこと。なぜ完全に近い形で保存され残されたのか？1番目に組合員数が多く、組合事務所が大きかったことがあげられます。以前の組合事務所は水俣工場内にあり、1956（昭和31）年に工場外に移転されており、その時に資料が全然処分されなかったこと事態が不思議です。2番目に、1953（昭和28）年の「身分制撤廃闘争」の時の記録や残された写真等からも伺い知ることができますが、新日窒労組が組合員・家族、地域住民から絶大な信頼を得ていたことを挙げるすることができます。3番目に歴代の執行部・事務局長が誇りと信念を持ち、資料の重要性を認識し保存してもらったお陰でしょう。個人的には、長年書記長を務められた江口正安さんの資料整理・保存能力と執念とも思える仕事ぶり、山川正進書記を含む事務局、奥哲志さんの几帳面さによるところが大きかったと思います。

資料展と資料整理を行っての20年の感想

熊本学園大学に寄贈された膨大な組合資料は、その後水俣市立元保育園（若草）を水俣市から借用し改修工事を終えた「水俣学現地センター」に運ばれ、2005年から元組合員7人（小形喜代太、徳永常喜、糸田憲夫、高橋幸一、山平勝利、緒方紀明、山下善寛）が整理を開始しました。2008年に資料目録が完成。2009年には、山本尚友・花田昌宣先生の指導の下、井上ゆかり・田尻雅美さん等の協力を得、東京、大阪、熊本で巡回展を開催することができました。

東京での「講演会・資料展」

法政大学大原社会問題研究所の全面的なご協力で法政大学市ヶ谷キャンパスにて盛大に開催することができました。初日から会場には、千葉の五井工場に転勤した元組合員・家族。野田の東洋シリコンへの転勤者、関東で組合活動に関心を示す活動家、水俣病患者支援者など多くの人が駆けつけて下さった。中にはわざわざ九州の長崎から「組合の恥宣言の実物」を見に上京して下さった人がいて、その熱意に驚くと共に、一次資料の持つ価値・重要性を学ぶことができました。

大阪の巡回展

大阪人権博物館の協力で開催することができました。多くの参加者があり、差別を研究する「人権研究者」や、むかし水俣工場で組合活動をしていたという人も訪ねて来られ、昔の組合活動の一部を伺い知ることができました。また大阪には、チッソ大阪営業所（元本店）があり、水俣から転勤した友人やチッソの株主総会に応援に来てくれた人、水俣病裁判支援者など多くの人で賑わいました。

熊本の巡回展

熊本巡回展は、熊本学園大学の14号館で行われました。多くの学生と一般市民に加え、元合化労連九州の仲間、熊本県評の仲間、水俣病の裁判を支えてくれた告発の仲間など多くの人が観に来て下さいました。皆さんの関心と感想は、安定賃金反対闘争時の苦労話とチッソ労働者差別の実態に驚いておられました。

水俣巡回展とシンポジウム

水俣展は熊本学園大学水俣現地研究センターと隣の婦人会館で開催され、シンポジウムは

公民館で開催されました。「組合資料」は2か所に分けての展示となりましたが、水俣学現地研究センターを知ってもらえたこと、婦人運動と労働運動の歴史を知るいい機会となったのでは？と思っています。参観者は組合OBと主婦の会会員だけでなく、組合員の息子や娘の参加もあり、安定賃金反対闘争が家族ぐるみ・地域ぐるみで戦われたこと等を理解していただいたと思っています。シンポジウムは、熊本学園大学の坂本学長、水俣市の副市長、婦人会会長も来賓として参加していただき、盛大に開催することができました。同時に行われた「新日窒労組OB・家族の作品展」には、多くの力作（300点）が寄せられ、大いに賑わいました。

全国での巡回展が一段落した後の作業

それまでの文書類中心の整理作業から、膨大な約64,000枚の写真整理作業に移行しました。小形喜代太さん、徳永常喜さん、緒方紀明さん、山下善寛の4人がその任に当たっていました。交通事故で亡くなられた小形喜代太さん、巡回展の準備から代議委員会議事録の整理で頑張ってくれた山平勝利さん等の素晴らしいメンバーは抜けられたが、現在3人で力を合わせ楽しく写真整理をさせてもらっています。



図1 資料整理をする3人
(左手前は徳永常喜、左奥は緒方紀明、右奥は筆者)
出典：水俣学研究センター所蔵

資料整理作業は、感動の連続

初期の頃、団体交渉に水俣の物価を調査して団交（賃上げ）に臨んでおられたことを知り、当時の苦勞と真摯な取り組みに労働運動歴史を知ることができました。また進駐軍の指導で

組合活動家を排除した1950（昭和25）年の「レッドパージに関する資料」は、全国の労働組合の中でも記録（水俣の該当者25名）が残っているのは珍しく、大変貴重な資料であることを再確認しました。

「安定賃金反対闘争」は、組合潰しと人権を無視した差別攻撃との戦いで、「身分制撤廃闘争」、「水俣病闘争」と合わせ、水俣の夜明けの「三大闘争」だったと私は位置付けています。

組合の「恥宣言」と「公害ストライキ」は、水俣病闘争や労働運動の中では高く評価されていますが、歴史的評価は今後に残されています。「労働災害・職業」に対し、労働組合はどう対応したかの記録「安全衛生関係資料」も、大変貴重な資料であると思っています。これら一連の貴重な資料を是非、「水俣学現地研究センター」に足を運び、実物を手にとって見ていただきたいと思います。水俣の労働者の熱い思いと、肌の温もりを感じることができると信じています。

水俣学とのかかわり

「水俣学」の基本理念は、学問領域の壁（垣根）を超え、あくまで被害現地に（水俣に限らない）根ざした研究体制を構築し、現地に学び、現地に返す。国際的視野から研究交流や調査を実施する。など5つの項目が挙げられています。私は1969（昭和44）年の第一次水俣病訴訟の際にできた「水俣病研究会」や「竹の子塾」で原田先生との出会いから、チッソを退職後の2001（平成13）年に「水俣学講義」で講師として呼んでいただくなど「水俣学」を始められた時から参加させてもらっています。

しかし水俣学講義の講師を依頼された当時、「水俣学」についてのイメージがまだはっきり掴めず、「水俣で行われていた竹の子塾を大きくしたようなものではないでしょうか？」と失礼な発言をしたことを、この場を借りてお詫びします。私は「水俣学との関り」を持てたことで、物の見方・考え方・思想面・行動面で、多くのことを学ぶことができました。

国際交流では、原田・花田・宮北先生等との韓国フィールドワークで、日本企業の進出状況と公害発生状況を知ることができました。タイへの公害・職業調査では、劣悪な労働の実態、環境破壊を目の当たりにし、交流の必要性和、日本（水俣）の教訓が活かされていない事を実感しました。国内では、鉍毒事件で有名な足尾鉍毒事件の現場、北海道のイトムカの調査では廃棄物の処理を含め現場での学びの重要性を感じることができました。現地水俣では、宮北・藤本先生らと、「ごみ減量運動・環境首都の指定町づくり」、など多くの活動に参加させていただき、行政との垣根を超えた活動の必要性を学びました。「みなまた地域研究会」では、中地・花田先生の指導を受け水俣市内の水銀汚染の調査を行い、ブックレットに報告する事ができました。また、船を貸し切った「不知火海沿岸の実態調査」では、チッソが流したメチル水銀汚染の広がりを知ることができました。「水俣の環境を考える市民会議」では、現在水俣の山間部に建設が予定されている「風力建設反対運動」を、宮北・中地先生達と行っています。先生方のご指導を仰ぎながら、市民運動で風力建設を是非中止させ

たいと思っています。

今後の活動への期待・要望

水俣学現地センターでは、資料の劣化を防ぐ酸化防止、カバー作成、温度管理、湿度管理、電動書架など、多くの対策をとってもらっています。保管資料を、まず多くの人に現地水俣に来ていただき、生の資料（一次資料）を手にとって見ていただきたい。水俣現地研究センターで実物に学ぶことで、水俣の労働者の生き方、感じ方、技術と労働の知恵など感じ取ることができると思います。また熊本学園大学の労働者に対する暖かいまなざし、資料に対する深い愛着等を感じていただけると確信します。水俣に来るのが難しい人は、インターネットを活用いただく以外にありませんが、残念ながら電子化がまだ進んでいません。従って、重要資料だけでも、電子化を進めていただくことをお願いします。また、現在、現地センターの開館日時は、火曜日～金曜日で10時～16時迄で、人材と予算確保が大変ですが、土曜と日曜日の開館を検討して欲しいと思います。

活動面では、世界を舞台にした活動は大変ですが、「楽しく学べる環境づくり」をお願いしたいと思います。最後に、水俣の高齢化・過疎化とも関係しますが、是非若手の研究者・後継者の育成をお願いし、水俣の活性化に繋がれたらと思います。